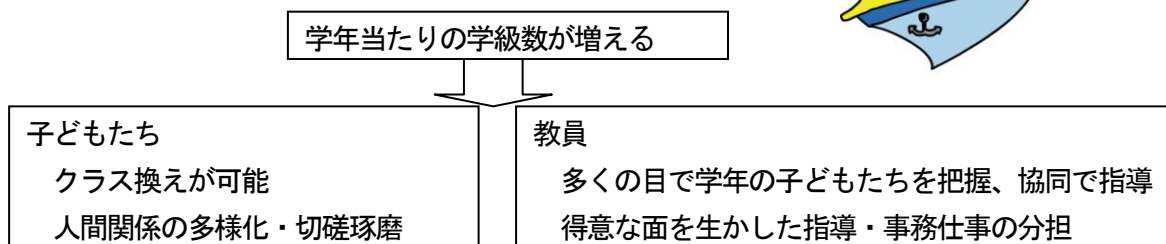
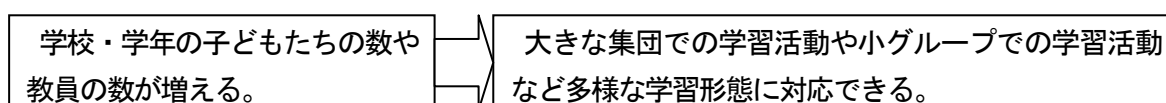


小規模校を適正規模にすることで何がよくなるのですか。

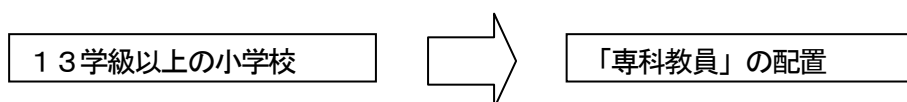
◎小学校で期待される効果



全校6学級の小規模小学校の場合、1学年1学級なので、クラス換えができず、担任も各学年に1人しかいないので、1人の教員の眼で自分の学級(=学年)の子どもたちを見るしかありません。これが例えば、18学級になれば、各学年3学級となるので、クラス換えもでき、担任も各学年3人ずついることになり、3人の異なる教員の眼で学年の子どもたちを多面的に把握し、互いに情報交換したり一緒に指導にあたったりすることができるようになります。学校を適正な規模にすることにより、子どもたちの人間関係の多様化を図り、互いに切磋琢磨し、社会性や向上心を養うことができるようになるだけでなく、様々な特性を持った教員たちが子どもたちとかわかり、自分の得意な面を生かした指導を行うとともに、指導法の研究を行ったり事務仕事を分担しあったりすることができるようになります。



学校での学習には、ある程度多い人数で行った方が効果が上がる内容と少ない人数の方が効果が上がる内容とがあります。例えば、互いに考え方や意見を出し合い思考を深める話し合いや合唱・合奏・団体競技・学校行事などは、人数が多い方がよく、適正規模校になれば、このような大きな集団による活動がしやすくなります。一方、算数の計算技能を高める学習や理科の実験などでは、チーム・ティーチングや少人数に分けた指導で効果を上げることができます。適正規模校になれば、少人数指導を担当する教員の配置の可能性も高くなるので、教科の特質や学習内容に応じた指導が行えるようになります。



13学級以上の小学校には、いわゆる「専科教員」が配置され、多くの場合音楽を担当しています。音楽のような子どもたちの感性を育むことが重要な教科においては、専門の先生の影響力はたいへん大きいものがあります。学級担任は、「専科教員」が授業をしている間に、子どもたちの指導に必要な準備ができ、事務処理時間を確保できるというメリットもあります。

